

第95回日本結核・非結核性抗酸菌症学会総会・学術講演会 “Change and Challenge 結核ゼロへの道と日常化する 非結核性抗酸菌症へのアプローチ”に参加して —オンライン学会総会—



結核研究所臨床・疫学部
部長 大角 晃弘

2020年6月に、横浜市において開催予定であった標記学会総会が、COVID-19感染拡大の影響で開催延期となり、同年10月11日と12日に感染拡大防止のためにオンラインでの開催となりました。95回を数える由緒ある本学会総会が、オンラインで開催されるのは初めてであり、準備委員の先生方と事務局の方々が大変ご苦労されたことが推察されます。今回の総会は、2020年1月に学会名を「日本結核・非結核性抗酸菌症学会」に変更した後初めての開催でした。私にとっても、初めて全国レベルでのオンライン学会総会参加となり、新しい発見がいくつもありました。下記に、本学会総会に参加した印象について、私見として簡単に記載したいと思います。

本総会は、招請講演・特別セミナー・シンポジウム・Pro&Con[※]セッション・ランチョンセミナーのそれぞれにおいて、非結核性抗酸菌症の病理・診断・治療に関する内容がかなりの部分を占めていました。今

回は、オンライン開催に伴い、要望及び一般演題発表が抄録のみの発表となりましたが、非結核性抗酸菌症に関する演題がかなりの部分を占めている傾向は同様でした。結核が低蔓延化する状況の中、相対的に非結核性抗酸菌症への対応の重要性が増加していることが分かります。非結核性抗酸菌症の治療に関するトピックの一つは、今年7月に米国と欧州の呼吸器学会及び感染症学会が改訂した“Treatment of Nontuberculous Mycobacterial Pulmonary Disease: An Official ATS/ERS/ESCMID/IDSA Clinical Practice Guideline”でした。本ガイドライン作成の中心となってこられた米国のDr. Charles Daleyが招請講演において、そのポイントを説明しておられました。MAC症患者における治療開始時期は、特に空洞を有するか抗酸菌塗抹検査陽性となる場合には、経過観察するのではなくすぐに治療を開始すべき事、治療開始にあたっては、薬剤感受性試験を実施し、その結果に応じて薬剤選択をすべき

こと、クラリスロマイシンとアジスロマイシン2種のマクロライドのうちでは、アジスロマイシンの使用が勧められること、空洞を伴わない場合には、週3回の間欠治療が勧められること等が主な変更点としてあげられていました。特別セミナー2「肺非結核性抗酸菌症の治療」においては、長谷川直樹先生がわが国における非結核性抗酸菌症の治療指針の改訂も必要であるが、治療の適用においては、患者の生活の質（Quality of Life）を十分に考慮に入れた選択が重要であることを強調しておられました。

現在世界保健機関（WHO）は、地球上が結核ゼロとなることを目指して、結核罹患率を2035年までに人口10万対10以下、2050年までに人口100万対1以下を数値目標としています。単一病原体として世界の死因トップであり続けている結核の根絶のためには、現在可能な対策を包括的に強化するとともに、結核及び潜在性結核感染症の診断・治療における新しい技術の導入と新しいワクチン開発が必要となっています。本学会においても、結核低蔓延状況における更なる結核対策強化のための方策として、特に高齢者結核対策・外国生まれ結核対策強化の必要性が強調されていました。また、森亨先生が招請講演「結核低蔓延化への道のりと今後進むべき対策」において、幅広い領域における結核研究・技術開発・対策での現状と、私たちが取り組むべき多くの課題について概観しておられました。

本学会がオンライン開催となることによって見られた、いくつかの点を取り上げたいと思います。まず、海外在住の著名な4名の先生方の講演をオンラインで聴くことができました。例年は、海外の講師を招聘するのは1～2名だったと思いますが、オンライン開催故に、複数の海外在住の先生方をお招きできる（オンラインですが）のは、オンライン開催ならではのことだと思います。今回の学会で、2日間にわたって、計8つのジョイントシンポジウムを他の国内関連学会と

ともに開催したのも初めての試みでした。私もその内日本サルコイドーシス肉芽腫性疾患学会とのシンポジウムを視聴させてもらい、最近まで未解決であったサルコイドーシスの原因に関して、病原体として *Propionibacterium acnes* の関与が確実であることに至る過去20年間ほどの経緯について江石義信先生から聞くことができました。オンライン開催ならではの一つは、予め収録されている発表内容を参加者がオンデマンドで視聴できることです。このことにより、通常同時進行しているシンポジウムや講演を、参加者の都合の良い時に、何度でも視聴できます。例えば、ランチョンセミナーは、通常各日1つしか参加できませんが、今回は予め収録された各日複数のランチョンセミナーの視聴が可能でした。（勿論、昼食の弁当はありません。）一方、今回のオンライン学会では、要望課題と一般演題が全て口頭での発表は無く、抄録での発表のみとなりました。一題あたりの発表時間と質疑応答時間が短い要望課題と一般演題において、決められた時間（通常7～8分）内にオンライン発表をするのが困難と考えられた結果かと推察します（他に理由があるかもしれません）。今年9月に実施された日本結核・非結核性抗酸菌症学会関東支部学会では、各短時間の一般演題が同時に2会場で進行していましたが、概ね予定通りの進行状況でした。オンライン発表の媒体としてのズーム利用についても、多くの参加者がかなりなれてきていると思われます。次回の本学会がどのような形で開催されるのか未定ですが、私見としては、一般演題の発表も十分対応可能と思います。

私にとっても、多くの面で「初めての経験」が多かった学会でした。次回第96回は、名古屋での開催が予定されていますが、COVID-19による未曾有の事態を経験しつつ、どのような新しい知見を得ることができる学会となるか、期待しつつ準備していこうと思います。🐼

※編集部注：ある論点について賛成と反対の立場にわかれて議論を行うこと